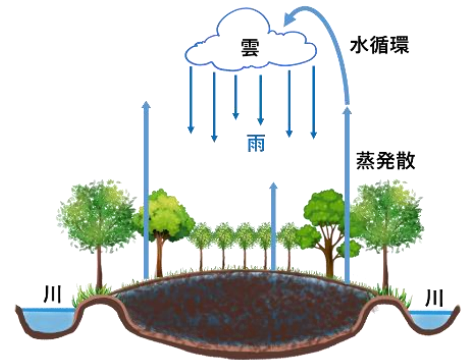


【参考資料】住友林業が培ってきた熱帯泥炭地の管理モデル

住友林業は 2010 年からインドネシアの西カリマンタン州で大規模産業植林事業を行っています。事業地には熱帯泥炭地が含まれています。熱帯泥炭地とは枯れた樹木などの植物遺骸が腐らずに、有機物のかたまりとして堆積した土壌のことをいいます。熱帯泥炭地はインドネシアやアマゾン、アフリカのコンゴ盆地などに分布しています。

熱帯泥炭地の特徴の一つは大量の水と炭素を抱えていることです。もし泥炭地が無秩序に破壊されれば、大量の CO₂ が大気中に排出されます。さらに、雨水を貯め、蒸発散を通じて大気中に返す、という大きな水の流れが失われ、干ばつや洪水などの異常気象が生じると考えられています。泥炭地を維持することは、森林やそこに生息する動物を守るだけでなく、自然災害や食糧問題から私たち人間を守ることに繋がっています。

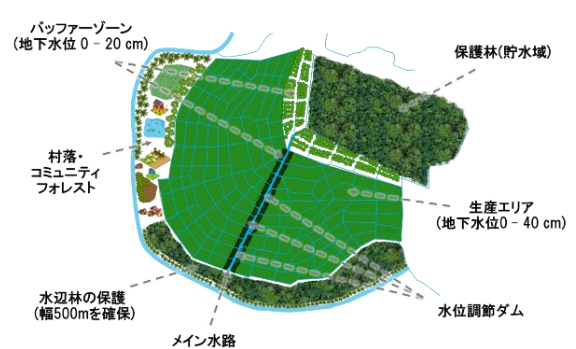


熱帯泥炭地は一般的には農林業に適さない土地です。そのほとんどが水で満たされ、生育する植物が酸欠状態になってしまうためです。したがって多くの植林地やパーム農園では水路を掘って、泥炭に含まれる水分を高いところから低いところへ流す排水型の管理を行ってきました。

地下水位が下がり乾燥した泥炭は非常に燃えやすい炭素のかたまりです。2015 年には泥炭地での火災が広範囲に広がった結果、大きな経済損失やヘイズ(煙害)による健康被害をもたらす事態にまで発展しました。周辺国を含めて 10 万人以上が呼吸器系疾患、心臓発作などで命を落としたと報告されています。また火災によって大気中に排出された CO₂ は、一説には 8.9 億トンともいわれ、その年の世界の CO₂ 排出量の 2.5% に相当します。

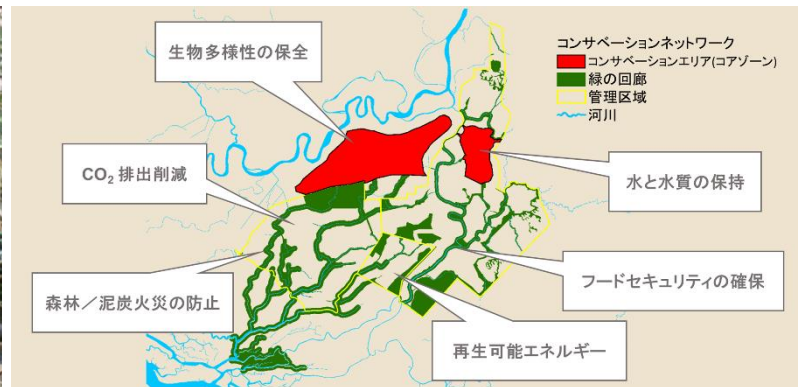
一方当社グループでは泥炭火災を防止し熱帯泥炭地で持続的に事業を行うため、貯水型の水位管理に取り組んでいます。2010 年の事業開始時に広大な面積で地形調査を行い、地下水位を下げないためのインフラを開発しました。また現在も地下水位の変化をリアルタイムで観測し、泥炭が燃えにくく、かつ植林木が生育できる地下水位を常に維持しています。

この取り組みの結果、泥炭地を乾燥させない世界で唯一の管理モデルを確立し、熱帯泥炭地の維持と植林事業の両立に成功しています。



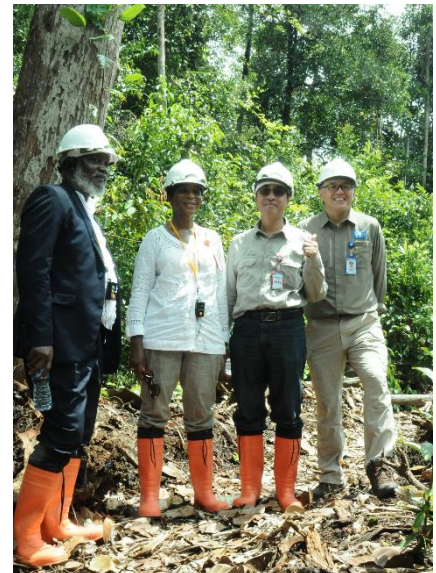
さらに当社グループでは泥炭地の適切な管理だけでなく、生物多様性の保全や地域社会への貢献といった「自然資本」としての付加価値が加わった森づくりを意識しています。地形や生態系の調査結果に基づき、保護すべき森林と植林事業のために活用すべきエリアをゾーニングし、それぞれの役割に応じた管理を行っています。

また、生物多様性の保全の取り組みとして、コンサベーション・ネットワークの概念を提唱しました。これはオランウータンをはじめとする希少動物が自由に行き来できる「緑の回廊」を自社エリアだけでなく、隣接する他社や政府管轄の森林にもまたがって設定したものです。



以上の取り組みは様々なステークホルダーから国際的に高い評価を獲得しています。気候変動枠組条約の締約国会議(COP)には 2017 年から 3 年連続でインドネシアの民間企業代表として招待され、泥炭地管理技術やコンサベーション・ネットワークの紹介を行っています。さらに 2018 年にはインドネシアと同じく泥炭地を有するコンゴ共和国、コンゴ民主共和国の大臣らが、泥炭地管理の先進事例として当社を訪問し、水位管理システムを視察しました。

当社グループは今後も熱帯泥炭地管理のリーディングカンパニーとして、経済性と環境保護の両立を目指した森林経営を行ってまいります。



当社グループを訪問した(左から)コンゴ民主共和国ホセ総局長、コンゴ共和国アルレット大臣、インドネシア環境林業省・森林研究開発庁アグス長官。